
天使ノ白イ羽

四季 ワタリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使ノ白羽

【NZコード】

N5047E

【作者名】

四季 ワタリ

【あらすじ】

『死神はある一定数の命を天国に送り届けると天使になれる……』

前世の記憶がないユウは、人間の命を後一人分狩るとその条件を満たすことのできる天使目前の死神だ。そんな彼が最期の命にと目をつけたのは、歪んだ世界からの解放を望む、廃墟となつたビルで生活する一人の少女だった。

プロローグ（前書き）

全てを犠牲にして夢の果てに、何がこの手に残るのだろう。

プロローグ

うつすらと視界が開けると同時に、バチバチと何かを打ち付ける激しい音が耳に入る。

それが激しい雨によるものだと気付くのに、さほど時間も掛からなかつた。

鉄格子に覆われた小さな窓から見える空は、分厚い絨毯のような灰色の雲でうめつくされている。その雲からは文字通り、バケツをひっくり返したかのような大量の水が吐き出されていた。

目の覚めた私は枕元に置いてある目覚まし時計に手を伸ばす。力チカチと規則正しい機械音とともに、その表示は時刻が午前九時であることを指し示していた。

いつもより少し早く起床したようだ。確かに今日は、けたたましい目覚まし音を聞いたおぼえがない。それは私にとっては非常に珍しいことだった。

寝ぼけ眼を擦りながらベッドから出ようとした時、またふと外の世界に目を移す。

本当に激しい雨だつた。おそらくまともに前方すら見えないほどひどい視界だと思う。こんな厳しい状況の中を、普通の人たちは嫌な顔をしながらも歩いているのだろう。私には出来ないことなだけれど……。

自嘲気味な空気を胸に抱きながらリビングへと向かう。その中央にあるテーブルの上にはすっかり冷めてしまったトーストとコーヒー、それにノートの切れ端に走り書きされたメモが残されていた。
『二日ほど留守にする』

なんとか読み取れる程度の汚い字でそう書かれていた。きっと急いで書いたせいだろう。私は読み終えたメモを綺麗に小さく折り畳み、角に置かれた肩籠にほおりこむ。

テーブルに着き冷えきつた味氣無いトーストをかじり、適度に口

一ヒーで流し込む。やはりこちらも冷めていて美味しいとは感じられない。ねつとりとした嫌な苦みだけが舌に残るだけだ。いつもと変わらないこの不味い朝食を、私は黙々と無理やり胃に詰め込むようにして食べ終えた。

朝食の食器を洗い終え私は自分の部屋に戻った。大抵この時間帯はリビングに置いてあるこの家唯一のテレビの前に陣取り、ダラダラと鑑賞し続けるのだが今日はなんだか気分が乗らないらしい。自室に入ると体を投げ出しぶっどに倒れこんだ。ミシミシという短い悲鳴を上げながらもベッドは私を優しく受け入れてくれた。

激しく降り続く雨のせいだろうか。もやもやとした感情が私に襲いかかってくる。久しぶりの憂鬱感に胸は蝕まれているようだ。窓の外は相変わらずの大雨。いや、もしかしたら起床時よりも激しくなつていて感じさえする。

そんな光景を眺めていて私はハツとした。いつの間にか発していだ独り言に、頭は殴られたかのような鈍痛に疼き、体は小刻みに痙攣させられる。内から溢れ出すのはどす黒い恐怖心。

私はそれに抗うため強く自分自身を抱き締めた。それでも震えは止まらず、頭の痛みも引くどころか激しさを増すばかりだ。

もうそろそろ我慢の限界が近いと感じた私は、恐怖でうち震える体を懸命に動かし、地べたを這うようにして部屋の角にある裁縫箱を目指す。そして直ぐさま蓋を開き、中から一円玉ほどの大きさの白いカプセル薬を取り出し、急いで口の中にほおりこんだ。吐き気を抑え、不快な固体が喉を通り過ぎるのを感じてから数秒も経たないうちに、自分では抑えられなかつた体の震えが瞬時に止まり、激しい頭痛が嘘のように治まった。

短時間の発作だったにもかかわらず体力はゴッソリと削られてしまい、しばらくは動けそうにもない。薬の副作用のためか目の焦点もぼやけてきて視界が霞んでしまう。

私はその睡魔にも似た感覚に身を委ね、重たくなつた瞼を閉じる

まぶた

ことにした。

どのくらい眠っていたのだろう。私は誰かの気配を感じ、意識が急速に研ぎ澄まされる。

現在この家には私しか居ないはずだった。もう一人の住人である家主は、三日間留守にするとメモを残し外出しているからだ。でも、もしかしたら家主が何か忘れ物をして、取りに帰ってきたのかもしない。確認のためリビングに向かう。

だがそこに人影はなかつた。スイッチの切られた黒いテレビ画面に私の姿が映し出されているだけで、何か物が動かされている形跡も無く、眠る前と同じ情景が目の前に広がつている。

しかしそれでも気配は消えることなく、それどころか存在感を増してひしひしと伝わつてくる。同時に突き刺さるような痛い視線も感じる。

私は急いでリビング以外の場所を確認した。トイレ、浴室、玄関……。確認はすれど、どこの部屋にも異常はないようだ。

拭えない違和感を抱えたまま、自然と足は自室へと向かう。何かの強力な力で操られるかのように……。

部屋に入ると不思議なことに、それまであやふやだった気配が消え去り、代わりに窓の外から確固とした何者かの存在を感じる。私は好奇心と僅かな恐れに急かされて、外の世界へと視線を移す。土砂降りの雨。滝のようにガラスを滑る水。低い唸り声を上げながら空気を切り裂く風。先ほどと何も変わらない光景、……のはずなのだが、大きく違う点が一つだけあつた。

「何だろ?あの光は?」

ぼやけたガラス越しにでも確認することのできる鮮やかな光に、私の両眼は盗まれていた。

太陽のように強い光でも、ロウソクのように弱々しい光でもない。私はその光を正しく形容できる言葉を必死に探したが、どの言葉も当てはまらなかつた。

私は目を凝らし光を発するモノの正体を掴もうとする。しばらく見るうちにそれが人の形をしていることに気付いた。

そんな馬鹿なことがある訳ない。私の記憶が正しければこの部屋はビルの七階に位置しているはずだ。つまり人影などが、窓の外の風景に混ざつて映ることなどは有り得ない。

奇怪な現象に緊張を隠せない。私が見ている光景はただの夢なのがもしかないとthoughtた。だから目を瞑つてしまふく時間がたてば、私の目の前には以前と同じ雨の世界が映るだけだろう。

瞼をギュッと閉じ、視界から全てのものを遮る。真つ暗な闇が取り乱していた頭をゆっくりと解きほぐしていき、耳からは風雨が奏でている力強い音色が入つてくる。全ての感覚が正常な状況に近付いているのを感じる。

緊張が解け、落ち着きを取り戻したはずの頭。それなのに、ふいにおかしな言葉が真つ黒な脳裏に浮かんでくる。

でも、もしも羽がついているのなら……。

自分でもその言葉の意味をよく理解できないままに、僅かな期待と懇願を瞳に宿らせ黒い世界を打ち破る。

この場所に例えば私以外の人が居るとしたら、その人はきっと自分が変な夢か幻を見ていると思うだろう。そして、こんな存在は有り得ないと断言して、その光景を見た自分の目を信じることはしないはずだ。

“彼”的存在を認識した時には、あれほど激しく降つていた雨が一時の間上がつていたのかもしれない。ガラスの汚れやそこを流れる雨の障害を受けることなく、私の網膜には鮮明な美しい姿が焼き付けられていたからだ。

顔まではさすがに確認することはできなかつたが、確かに“彼”的の背中には雄大で気品のある白い羽がついていた。それは遠い昔に誰かと一緒に読んだ絵本の挿絵に載つていた、まさしく天使の羽。喜び、痛み、悲しみ、迷い、懐かしさ……。私の内にいつの間に

か秘められていたあらゆる感情が止めどなく溢れ出し、それは涙となつて外に流されていく。そして私は“彼”を一心に見つめたまま、あの時から心の奥底にずっと隠してきた思いを、切望を、嘆願を、雨音に書き消されそうな弱々しい声で吐露していたのだった。

それは
『私ヲ助ケテ……！』
といつ短い願い

雨ノ世界ノ住人タチ（1）

今日六月と呼ばれている月を、かつての人たちは水無月と呼んでいたらしい。水の無い月と書いて水無月。

誰でも最初は文字通りの意味に受けとるはずだ。つまり、水の無い月が水無月。

しかし人間の考え出した文字には、例えそれが一文字の漢字だつたとしても、その中には様々な意味が付されているらしいのだ。今回の場合でいえば水無月の『無』は無いという意味ではなく、連体助詞である『な』、簡単にすると『の』という意味になるらしい。

だから、水が無い月なのではなく、水の月

なるほど、そうであるならこの状況にも納得がいく。しかしこの

結論に至ったのは今からしばらく後のことになる。

ゆえに今のユウたちにとっての水無月は、水の無い月のはずだった。

地上では雨が降っていた。とこどん水が降り注いでいた。あの伝説になつてゐる大洪水を生き延びたという某人物ですら、おそらく真っ青になるほどの大雨だと思う。まあ、最後の例えは少し大袈裟かもしれないけど……。

この辺りの地域は先日梅雨入りしたばかりだというのに、既に前年の六月の総降水量をはるかに上回る雨が降つてゐるらしい。と電器屋に置いてあるテレビのニュースが告げている。

辺りを見回してみると通行人は皆、傘を片手に歩道を忙しく往来している。この激しい雨の中では対雨用に開発された傘という道具でさえ、何の役にも立たないただのガラクタにすぎなかつた。

仕事中のサラリーマンも、買い物帰りの主婦も、試験のためか午前中に帰宅している学生も、雨からの攻撃に守られている部分は頭

だけという悲惨な状況だった。それは何も他人だけに当てはまるものではなく、無論自分にも当てはまるわけで。

ユウは現在の自分の状況を簡単に整理してみる。

先日購入したばかりのお気に入りのジーンズ　死亡。
同じく先日、店の店員に似合いますよと煽おだてられてつい買ってしまったそこそこのTシャツ　危篤状態。

ずっと履いていても疲れないという謳い文句で、いま中高年の間で大ヒットしているらしきスニーーカー　歩いて数秒で死亡。
雨による激しい戦火……ならぬ戦水は、例に違わずユウ自身にも多大な被害をもたらしていた。つい先ほどまでこの格好のままプールに浸かって遊んでいました、と言つても誰も疑うことができないほど、完膚なきまでのびしょ濡れ状態だった。

「これは酷いな……」

自然の力に対して無力なのは何も人間だけではなく、死神であるユウも同じである。抗いようがないので、ただそれを受け入れることしかできない。

電器屋の店前。僅かの屋根の出っ張りが雨を防いでくれていた。

「しばらくは止みそうにないな。アルトはどう思う？」

ユウの傍らには小さな黒猫がちよこんと座っていた。その瞳は美しく、透き通る碧い宝石をそのまま入れているかのようだ。

「ユウの意見に同意……」

男の子とも女の子ともつかない、幼さを残した中性的な声でアルトは答えた。その瞳の視線はユウと同じく道行く人達を見つめている。

「そつか……でも参つたなあ……」

地上で雨がこんなにも降つているとは考えもしなかつた。

一年くらい前の六月にもこの辺りに仕事の関係で数日間滞在したが、その時は雨どころかちょっとばかりの滴すら落ちてこなかつた。しっかりと前もって天気予報を確認しておけば、などと考えても後の祭りだ。

「地上の情報なんて、事前にセラからにでも聞いておけばよかつたのに……ユウの無計画のせいだから仕方がないよ」

アルトの意見はもつともだった。だからユウは何も言い返せず、何も聞いていないかのように振る舞い辺りを見回していた。

一人が居るのは大きな駅に直結している商店街の外れの方だ。十メートルほど先に行くとここより道幅の広い本道があり、そこはアーケードで覆われているため雨に濡れる心配はなかった。

雨宿りをするだけならその本道の中に入ればいいのだが、雨のためかそこは大勢の人たちでごった返している。

いつからだつただろう。ユウは人込みに混ざるのが苦手だった。その中に長時間居ようものなら吐き気や頭痛、さらには腹痛まで催すほどの苦手ぶりだ。

一方のアルトも人込みは大の苦手らしい。なにより以前聞いた話によれば、人込みではなく人間自体に對して良い印象を抱いていないようだ。何がアルトをそうさせたのか、その理由を知りたいと思っていたがなかなか機会を見出だせず、結局は聞けずじまいのまま現在に至っている。

そんなわけで二人はこのような場所に居るのだが、そろそろ限界が近いのも事実だった。

風が先ほどよりも強くなつた。風に運ばれた雨が、今まで濡れることのなかつた顔面に打ち付ける。

「風が強くなつたみたいだから、そろそろ移動しようつか？」

「ん？」

「どこに？」

アルトの碧い宝石がはるか上方にあるユウの瞳を仰ぎ見る。そんなアルトに意地悪な微笑みを返し、ユウを少し離れた人込みに視線を移す。

「本気で言つてるの？ ユウもおいらと一緒に、人込みが嫌いって言つてたじゃんかあ」

「うん、そうなんだけど……顔が雨で濡れるのはいやだし……それに長時間でなければ僕は問題ないから」

「ふーん。一応言つとくけど、おいらは嫌だよ」

「そつか……だつたらアルトはここに置いていく」とあるよ」

先ほどよりも意地悪な笑みでコウは答えた。一方のアルトは眉をピクピクさせて、かなり苛々しているようだつた。

「でもさコウ、使い魔と一緒に行動しない死神なんて、ただの無力な人間と同じだよ？ それに使い魔じゃないと“死にかけの魂”は感知できないし……」

「それは確かに。でもその前に、使い魔にとつて主人である死神の命令は絶対だ、つてセラが言つてたよ？」

セラという名前を出すとアルトが何も言えなくなることを知ったのは、つい最近のことだ。

「なぬぬー……」

悔しそうな低い声でアルトは唸つた。まだ完全には納得していないで、口をへの字に曲げたまま地面と睨めっこしている。

また一段と風が強さを増したようだ。コウは悩んでいるアルトを背に、人込みへと足を向けた。

「おいらから声を掛けなくても、この主人に対して忠実で気遣いのある使い魔がとる行動なんて、最初から決まつているのだから
「強引な主人つて最悪！ 天界に戻つたらセラに言いつけてやるんだからね！」

ぶつぶつと文句を言いながらもアルトはコウの背中を走つて追いかけていく。

そうして二人は商店街の人込みの中に融けていった。

雨ノ世界ノ住人タチ（2）

遠目で眺てゐると、実際にまじかに寄つて見るとでは、やはりかなりの違いがあるものだと思つ。

今は後方に見える電器屋の前で眺めていた時も人がたくさん居るとは感じていたが、実際に近寄つてみると想像を上回る人の群れであつたこと理解する。

雨の日特有のじめじめした空氣にくわえ、さらに人の熱氣が相重なつてゐるためか、アーケードの中は予想以上に暑かつた。おそらくジッとしていただけでも、額から汗が滲み出るはずだ。

流行の曲なのか、商店街の中ではテンポのよいリズムの歌が流されている。

その音色に人の靴音や会話、加えて雨音などが混ざるものだから、本当に騒々しいといつたらない。

コウはやつぱり来なければよかつたと思ったが、さすがに口には出せなかつた。もし口に出してしまつたら、隣りをとてとて歩いているアルトに、喧しく詰め寄られるのは明白だからだ。

それにしてもやはり街の中心地にある商店街。様々なお店が軒を連ねてゐる。

品数が数えるほどしか残つていないパン屋。ガヤガヤと機械音が鳴り響くゲームセンター。近頃急激に成長を遂げてゐる携帯電話会社のショップ。一列にズラッと並び立ち読みしてゐる人が多い中古の本屋など。

どこのお店も雨のためかそれなりの人で賑わつてゐた。

無論その中にわざわざ入るうとは思わないから、一人はチラチラと視線を送るだけだ。

「久しぶりに下界の街に来たけど……やつぱりこいつら人込みは、おいら苦手だよ……」

「うん、僕もだよ。でもこいつら見てお店をぶらぶらと見て回るのは

好きなんだけどね」

いわゆるウインドウショッピングといつやつだ。一応、男性としてこういう趣味をもつている者は珍しい部類に入るのだろう。

顔見知りの同性の死神たちにそのことを話すと、大抵の者は驚いて苦笑していたのを思い出す。

「へえ、そうだったんだ。コウとは結構付き合い長いのに、おいらそんなこと全然知らなかつたよ」

アルトは意外な一面を垣間見て少し驚いているようだ。

確かにアルトとの付き合いは長いものだつた。死神に転生して以來ずっと傍らに存在し、仕事の面でもそれ以外の面でも何かと世話を焼いてくれたりする。

ついでにいえば、アルトは使い魔の中でもかなり優秀な部類に入る使い魔だ。その能力もさることながら、経験という点に関してもたくさんの場数を踏んできた歴戦の猛者である。

その優秀さにこれまで何度も助けられたことか。数えることができないほどの修羅場を、アルトのおかげで乗り越えることができたのは紛れも無い事実だつた。

「秘密くらい誰にだつてあるものだよ。別に秘密にしてたつてわけでもないんだけどね……」

苦笑して答えたコウの意見に対し、アルトは『ふーん』と訝しげに流しながら聞いている。

さて、かれこれ三十分くらいは歩いただらうか。時間を気にすることなくゅつくじゅつくりと進んで来たので、正確な所要時間はわからないが、どうやらやつと商店街の出口の一つに近付いてきたようだ。

「やつぱつまだ雨降つてるよ……」

先ほど見た時となんら変わることない雨の世界を見つめ、アルトは溜め息混じりには呟いた。

さすがに三十分程度では天候も変わらないか。

もう少し雨が弱くなるのを待つのが賢明かもしれない。

ユウは仕方なく今まで歩いてきた商店街を戻ることにした。

「あれ……さつきまであんな店あつたっけ……？」

それはふと振り向いた瞬間に視界に飛び込んできた。

商店街の出口に程近い、数十メートルも離れていない所にその店はしつかりと存在していた。

今通つてきたばかりだといふのに、此の期に及ぶまで気付くことができなかつたのは何故だらうと、少し不思議に思う。

古めかしい店で、お世辞にも綺麗だとはいえない外観だったが、決して汚いというわけでもない。むしろその古さからは、重ねた年月の重みだつたり暖かさだつたりといった良い面だけが際立つている。

その名前を『思い出の館』といつらじい。店の上方には、その店名が彫られた木目の看板が一人を見下ろしている。「なんともキザつた名前だよね」

アルトの言葉に、ユウは無言で頷き肯定してみせた。

「それにいかにも怪しい雰囲気が漂つてゐるんだけど……」

その言葉にも同意とばかりにもう一つ無言で頷いてみる。

ショーウィンドウには商品らしき物は何一つ無く、その白地の床にはうつすらと埃が積もつてゐる。

窓もついていたが、ブラインドが下ろされてゐるため店内を窺い知ることはできない。隙間から電気の明かりが洩れてることから、誰かが中に居るのは確かだろう。

しばらくの間店先を興味深げに眺めているとチクチクとした視線を肌に感じた。それもかなり低いところからのものだ。

「どうしたのかな、アルト君……？」

下の方を確かめると視線の送り主であるアルトと目が合つた。その目は細められていて軽く睨み付けてるような感じだ。

その瞳からは『まさか入るうとは思つていないよね?』とか『早く他の場所に移動しようよ』と言つた心の声が聞こえてきた。

「ちょっとだけ……だめかな？」

「ダメ！」

コウが言葉を吐き追える前に、アルトは力強く断言した。

「そこまで強く否定しなくとも……」

少し残念に思つてゐるとアルトは一つ溜め息をつき、やれやれといふ表情で言葉を紡ぐ。

「コウも少しは感じてゐるとは思つけど……おののお店の中、おいらた

ちよりもはるかに濃厚な靈の力が漂つてゐる……」

アルトが言つようになつてゐるが、空氣はコウも確かに感じていた。

それは釣りなどで使う撒き餌に似ている。魚のみに効果のある匂いを漂わせ、魚だけをおびき寄せるトラップ。

この場合はコウやアルトといった靈者だけにしかその違和感を感じる事ができないようだ。現に店の辺りには多くの通行人がいたが、誰一人としてその普通でない雰囲気を気に掛ける様子は無い。むしろ彼等は最初から店の存在など無いかのように、視線の一つすら送ること無かった。

どうみても怪しい。ぬえに非常に興味をそそられるのも否定しゆうの無い事実であり……。

その場に立ち止まり考へてゐると、先ほどよつとせりて口調でアルトは捲し立てるように吐き出す。

「そんなに悩むことじゃないだろ！　じゃあ、おいらがハッキリと言つよ？　あのお店には近付かないほうがいい。関わりをもつとくつとよくないことが起こりそうな予感がするから……」

その真剣な瞳は、この意見がお願いとこつよりは懇願であることを示していた。

こんなアルトの姿を見るのは初めてだ。

他愛の無いちょつかいや憎まれ口を叩くいつもの面影は微塵も感じられない。

濃厚な氣配に当たられてる緊張感のためか、その表情は引きつ

ていて、冷や汗の雫が黒い毛を伝つて地面に落ちていた。

「『ごめん……アルトが言つよつてここはよくない場所みたいだ
ね。うん……他の所に行こつか」

これ以上、自分の意見を押し通すことはユウにはできなかつた。
アルトの意見が間違つたことなどこれまで無かつたし、いつ
も、何より僕のことを一番に心配してくれて適切な助言を与えてく
れた。

今回の必死さもその表れだろう。

だつたらこの親身な意見を無礙にすることなどできるだろうか?
その言葉にアルトはホツとした表情をみせた。

「さすがおいらの『ご主人様だ。わざわざこんな時に、危ういものに
首を突つ込むことなんてないよ。なんたつて、もうすぐ天使に昇格
する身なんだからね』

そう言いながらアルトは店を背にしてちよこちよこと歩き出す。
ユウもその小さくて大きな存在の後を追い出そうとする。

シャン……シャン……シャン……シャン。

鈴の音らしきものが聞こえた。

その音が頭の中で木靈する。

同時に視界が少しずつ霞んでいく。

追いかけていたはずのアルトの背中が波を打つ。
地面の正方形のタイルがふにゃふにゃに歪む。
なにかがおかしい。

いや、おかしいのは自分自身か?

頭の奥底でなにかがぐるぐると渦巻く。

それは新鮮な感覚。だけどかつては知つていた。

これは無くしたもの?

かつて失つたもの?

今まで欠けていったもの?

それはもしかして　？

最後にかろうじて感じることができたのは、頬から伝わる微かな痛みと石の冷たさだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5047e/>

天使ノ白イ羽

2010年10月9日16時17分発行